

I-3 学校評価自己評価表

令和7年度 学校評価表 (計画・中間 最終)  
[ 4月・11月 2月 ]

学校名 (安芸太田町立戸内小学校)

学校教育 目標	<b>「たくましく未来を拓く 児童の育成」 考え つながり やってみる</b>	経営理念 ミッション・ビジョン	<b>仲間とつながり、たくましく生きる児童を保護者・地域と共に育てる学校</b> <b>【育成していきたい資質能力】</b> (1)きく力(聴く・訊く) (2)表現力 (3)自己調整力	A : 100 ≤ 目標達成 B : 80 ≤ ほぼ達成 < 100 C : 60 ≤ もう少し < 80
------------	---------------------------------------------	--------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------

評価計画				自己評価							
中期経営目標	短期経営目標	目標達成のための 方策	評価指標	目標値	達成値	中間	○結果と課題 改善方法	達成値	最終	○結果と課題 改善方法	
					2学期	評価		3学期	評価		
学びに向かう力	主体的で深い学びのできる児童を育成する。	①基礎基本の定着を図る。 ②協調学習の推進を図り、自分で考え判断し、解決していく力を高める。	①「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を意識した授業を行う。 ②単元構成と授業展開の工夫を行う。	①国語・算数・社会・理科の期末テストにおいて、得点率8割以上の児童の割合 ②協調学習を学期に1回行う。研究推進に関する質問「自分で考えて学習に向き合い、問題を解決しようとしていますか」の肯定的回答の割合	①75% ②85%	①100% ②104%	A A	①得点率8割以上の児童の割合は75%だった。漢字の定着や語彙力不足が考えられる。新出漢字の学習の際には、関連する熟語や言葉の意味を丁寧に確認する。さまざまな分野の読書活動ができる取組を進める。 ②各担任が学期に1回以上、協調学習を行った。研究推進に関する質問の肯定的回答は88%だった。子どもたちは、課題に対して自分たちで解決しようとする自分の意見を伝えたり友達の考えを聞いたりする場面が見られる。引き続き、単元構成と授業展開導入の工夫を行うために、町内の同学年の担任と連携を強化する。また、導入の工夫についても、実践交流しながら継続して取り組む。	①103% ②111%	A A	①得点率8割以上の児童の割合は77%だった。各学級の漢字の学習方法を共有し、新出漢字や漢字練習では関連する熟語や言葉の意味を理解できるように工夫を行った。電子書籍を取り入れたことで、各教科に関連した本を読む機会が増え、個別最適な学びが充実した。 ②各担任が年間2回以上、協調学習を行った。研究推進に関する質問の肯定的回答は94%だった。3年生以上では、特に力を入れている理科教育を中心に課題から自分で考えるような授業デザインに挑戦した。友達とよりよい解を求めていくことの楽しさを味わわせることで深い学びにつながる授業づくりに取り組んでいく。
豊かな心	自他のよさを認め合い、友達とつながろうとする児童を育てる。	③互いを尊重し、協力しながら行動する態度を養う。 ④自己調整力を高め、前向きに挑戦しようとする意欲を高める。	③月1程度、児童が自主的な活動を行えるように係活動や委員会活動を活性化させる。 ④児童会活動や学級または行事等でお互いの頑張りを認め合ったり振り返ったりする場を充実させる。(児童集会で紹介する等)	③児童質問紙「学級の係や当番、委員会や行事などでがんばった場面があります。」の肯定的回答の割合 ④児童質問紙「何事にも挑戦し、前向きに取り組む努力をしている。」の肯定的回答の割合	③85% ④85%	③115% ④115%	A A	③肯定的回答の割合が98%であった。低学年では係や当番の仕事を中心に丁寧な振り返りが行われていること、中・高学年では委員会や児童集会を中心に、自分たちの生活を見直す場面を多く設けられていることが、今回の結果の要因であると考えられる。引き続き、児童の自主的な活動を推進するために、適切な指導や肯定的な評価を行っていく。 ④肯定的回答の割合が98%であった。各学級において「いいところ見つけカード」に取り組んだり、行事の度に学校目標の「やってみる」を意識して取り組めたことが要因と考える。今後は他学年の「いいところ見つけ」を行うなど、学年を超えてお互いのよさを伝えられる場を設定していく。	③115% ④112%	A A	③肯定的回答の割合が98%であった。中間評価に引き続き、低学年でも学級会なども活用して定期的な振り返りを行った。その中で活動の成果を価値づけることで役割を果たす喜びや学級への貢献意識を育むことができた。中・高学年では児童が主体となって企画・運営する場面を多く確保したことが当事者意識に繋がったと考えられる。しかし、児童自身が自らの取り組みを客観的に振り返る力がまだ不十分のため、今後も「自分の行動が周囲にどのような影響を与えたか」等の視点を与えながら振り返りの質を高める。 ④肯定的回答の割合が96%であった。各行事において、「まずはやってみる」ということに重点を置き、結果だけでなく取り組む意欲を価値づけてきたことが要因として挙げられる。今後も、小さなことでも児童のチャレンジした場面を見逃さず、評価していく。
健全な体	心も体もたくましい児童を育成する。	⑤基本的な生活習慣を確立する。 ⑥体力の向上を図る。	⑤期間を限定し、生活リズムの実態把握をし、メディアコントロールデーを設定する。 ⑥体力テストの記録をもとに自身の数値向上を目指す。(握力、50m走)	⑤メディアコントロールデーにおいて自分の目標を達成する児童の割合 ⑥学期末に記録を測定し、年度初めの記録を上回った児童の割合	⑤80% ⑥80%	⑤98% ⑥	B A	⑤ノーマディアデーの自分の目標が達成できた児童の割合は、78.5%であった。回数を重ねることに達成率が低下、夏休みの達成率が低いことが分かった。2学期以降、マンネリ化しないためにも学級での呼びかけの強化や、1学期の結果を保健だよりや保健室掲示版で伝えるなどし、児童や保護者の意識を高めていく。 ⑥2学期は全校児童の記録を測定はしていないが、5~6年生においては陸上記録会に向けて50m走の記録を測定した際に全児童が年度初めの数値を上回る結果となった。朝の会に「グーパー運動」を全校で取り組み握力向上を目指しており、学期末に年度初めの数値を上回るように目指す。	⑤100% ⑥105%	A A	⑤下半期は、自分の目標が達成できた児童の割合は80.5%であり、達成率は向上した。継続した取組により、ノーマディアデーが習慣化してきている家庭が増えたことが要因と考えられる。一方、生活習慣に課題がある児童の取り組み状況は、改善されいていない。今後は保健朝会等を活用し集団指導を実施したり、必要に応じて、個別指導にも力を入れていく。 ⑥年間を通して体づくり運動に取り組んだ結果、50m走(5・6ねん)の年度当初の記録を上回った児童の割合は、84%であった。新体力テストのアンケート結果から「運動する子としない子の二極化」や「自分の体を操作するスキルの低下」が課題として顕著に見られた。次年度は、テストの数値の向上とともに、生涯にわたって運動に親しむ「資質・能力」の育む取組を進めていく。
信頼される学校	地域・保護者、つながり、信頼される学校づくりを推進する。	⑦コミュニティスクールを中心とした地域の人材活用を積極的に行う。 ⑧働き方改革を推進する。	⑦地域の人材や素材を活用した授業や取り組みを全学年で行う。 ⑧業務改善を行い、職員の仕事のワーク・ライフ・バランスを推進する。	⑦全学級が年間に1回以上、地域の人材や素材を生かした取り組みを行う。 ⑧「自分の業務にやりがいをもっている」と感じる職員の割合	⑦100% ⑧100%	⑦100% ⑧100%	A A	⑦各学年とも、安芸太田の自然に触れる活動やグロスターチャーターを呼び寄せる授業などを合計21回行った。 ●3~6年生のクラブ活動(SUP体験、カヌー体験、染物体験、森林セラピー) ●1・2年生(三段峡で生き物と触れ合う活動) ●3・4年生(危機管理講座の方をグロスターチャーターとして防災の学習) ●5年生(林業体験) ●6年生(安芸太田町内の学校の歴史) ●6年生(スキー教室、1年生の昔遊び、5年生の福祉、6年生の学校の歴史等で社協や地域の方々の聞き取りなどを行い、授業や取組の充実を図る。 ⑧「自分の業務にやりがいがある」と感じる職員の割合が100%であった。一方で「自分の子どもと向き合う時間が確保できている(78%)、4.5時間を超える職員(月平均1~3人)であった。毎月の学校衛生委員会において、業務改善や職員の体調等について話し合い、業務の標準化や業務の見直しを常に行い、子どもと向き合う時間の充実を図ったり、一部の職員に負担がからないようにしたりする。	⑦100% ⑧100%	A A	⑦下半期は、1・2年生の昔遊び、スキー教室、福祉課と連携しての保健授業を行った。学校運営協議会委員の皆様を始め、役場や地域の方々にご協力いただき、児童が地域の良さや魅力を体験することができた。令和4年度には、理科の研究大会があり、地域の素材を生かした授業づくりを進めていく。 ⑧「自分の業務にやりがいがある」と感じる「自分の子どもと向き合う時間が確保できている」の肯定的回答が100%であった。4.5時間を超える職員は、月2名であった。業務の役割分担を明確にするとともに、お互いの協力体制を構築することを進め、各々がワークライフバランスを意識しながらやりがいをもって業務を遂行することができた。